

## 第2回 聖籠中学校運営方式検討委員会 議事要旨

日 時	令和7年12月17日(水) 午後3時00～午後4時50分
場 所	聖籠町役場 第2会議室
出席委員	大橋委員、田中(一)委員、有井委員、田中(健)委員、諏訪委員、丸田委員
欠席委員	宮川委員
事務局	小林教育未来課長、昆教育未来課長補佐、阿部副参事、小林子ども教育課長、大澤主事、宮森主任
次 第	1 開会 2 議事 (1) 聖籠中学校の教科センター方式とは (2) 開校後の運営方式の見直しの考え方 (3) 運営方式による効果と課題について (4) アンケート・ヒアリング調査について 3 事務連絡 4 閉会

### 議事(1) 聖籠中学校の教科センター方式とは

事務局	(資料に沿って説明)
委員	社会、理科の興味・関心度別のクラス編成とはどのようなものであったか。
事務局	「聖籠町民立聖籠中学校への道」には学習集団の編成について、「社会・理科などは「興味・関心度別」に混合して3～4クラスに編成する」と記載があるが、どのような興味・関心の内容で編成していたかは読み取れない。
委員	「3つのホームベースが1つのファミリーを形作る」とあったが、ファミリーとは何を指しているのか。
事務局	ホームベースの配置は、学年ごとにはではなく、1年A、3年A、2年Aの順で隣り合う配置で、この1年、2年、3年のAが1つのファミリーという表現で記録されている。
委員長	学級とホームベースは人数が違っていると認識しているが、それぞれどのように編成していたのか。
委員	まず1年1組という学級を編成して、その中で7～8人ずつAからE、F程度までの5～6集団に分けていたのではないかとと思われる。
委員長	各学級の中のAの生徒が、Aのホームベースに集まるということか。
委員	開校当時は、そのように朝の会をスタートしていたと思われる。異学年で交流し、上級生から学ぶという意図があった。10年前頃は、学級をA～Eなどに分けずに、1年1組と2年1組と3年1組が学級のまま隣り合う配置でホームベースに集まり、朝の会を行っていた。意図に反し、上級生から悪い面が受け継がれてしまうきっかけになってしまっていたことが課題となっていて、その後、ホームベースでの朝の会は廃止になった。
委員	教科オープンスペースとは、校舎のどの場所であったのか。
事務局	開校当時、教科オープンスペースは国語ラウンジ、数学ラウンジというように各教科で教室の間などに整備された。教科オープンスペースには多くのパソコンも配備されていた。

委員	学級とホームベースの2つの集団を設定していた狙いは何か。
事務局	生徒の主体性を育む狙いで導入されたのではないかと考えられる。
委員	学級とホームベースの集団の他にも、習熟度別で授業を編成したり、体育ではモジュールを取り入れて中間で種目を変えたりなど複雑なことを行っていた。いつも固定されたメンバーで取組むのではなく、多様な人たちと関わりを持ってもらうという狙いがあったと思われる。

## 議事（２）開校後の運営方式の見直しの考え方

事務局	（資料に沿って説明）
委員	議会での一般質問については、多くの議員から意見が出されたのか。
事務局	複数の議員から意見をいただいたが、議会全体としての意見というような形ではない。
委員	議会からは、令和6年6月に、「教科センター方式を廃止すべきではないか」という旨の意見が出されているが、この時点では教科センター方式は既に実施されていなかった。この議員は、教科センター方式が継続されていると誤認していたのか。
事務局	実情では教科センター方式による運営を行っていないが、町としては明確に教科センター方式を廃止するという意思決定をしていないため、実施しないのであれば町として廃止の意思決定をすべきではないか、という意図での意見であったと認識している。
委員	<p>開校当初は、教員全員がPHSを携帯していたため、生徒がそれぞれ移動していても、常に情報共有しながら対応ができた。他のPHSを配備していた学校では、外線の電話をPHSに転送することができ、教務室にいなくても電話を受けることができたので、聖籠中学校でも同様だったのではないかとと思うが、PHSの電波の廃止に伴いこれらのシステムもなくなった。情報交換ができず生徒に目が行き届きにくくなったことは、教員が不安を持った要因の一つではないかと考える。また、開校当初は、玄関に大型モニターが設置され、生徒は登校するとそこで1日のスケジュールを確認できるようになっていたはずであるが、コロナ禍前の段階で既に大型モニターはなくなっていた。少人数学習をするための町予算の講師も当初7人いたが今年0人と聞いている。</p> <p>このように最初と比較し設備や人材が削減されているので、教科センター方式で構想どおりのことを行うのは、年々厳しくなっているのではないかと。</p>
委員長	設備や人員を削減したことによって構想どおりの運営ができなくなって運営方式を見直さざるを得なくなったのか、それとも授業時間を短くするなどの運営方式の見直しをしたために設備や人員がいらなくなり削減されたのか。
委員	正確な情報であったか定かではないが、講師を採用して少人数学習を実施しているが学力が上がっていないことを議会で指摘され、そのため人員が削減されるようだと聞いた。
委員	通常の学級の人数での授業と少人数学習では、教員が生徒に手をかけられる時間が全然違う。少人数学習では単元によって習熟度別で授業をするなど工夫して行っていた。学力は少人数学習ができていなかったらもっと悪かったのではないかと。
委員	学問においては、習熟度別の学習で学力が上がるとはされていない。人手があれば学力が上がるという視点ではなく、人員を配置して教材研究の質などを上げることによって普通の授業が良くなるという視点が大事ではないか。これまでは、少人数学級にして習熟度

	別に学習をすることにより学力が定着するという考え方で授業が行われてきたと思うが、授業のシステムと人員の使い方の目的を変えることで、より学力の向上を図っていきける可能性があると感じた。限りある資源の中で、どのような体制を作っていくのかを議論していく必要があると考えるが、まずはどのような子どもを育成したいのかなど、町や中学校におけるビジョンや方針が共有されることが重要である。
--	---

### 議事（3）運営方式による効果と課題について

事務局	（資料に沿って説明）
委員長	総合教育会議の議事の中で出たメリット、デメリットを、あくまでも運営方式にこだわって整理した内容ということである。
委員	現状の、ほぼ教室固定方式で行っている状況や、その前の学級のままホームベースの場所を活用していた状況も含めた整理となっているのか。
事務局	そうである。
委員	では、教室固定方式では学級の意識が濃厚で、教科センター方式のホームベースでは学級の意識が希薄という整理について、教室という空間に入ると学級の意識が濃厚で、ホームベースという空間では同じ学級という集団で入っていても学級の意識が希薄というのはどういうことなのか。教科センター方式では学級経営が不十分だと整理されているのはどのような考え方によるのか教えていただきたい。
事務局	学級の意識については、常に同じ教室に同じメンバーであることを基準にして考えていると思われる。場所に帰属するものではないのではないか、という旨のご意見か。
委員	考え方が整わない中で整理が行われているのではないかという印象を持った。
委員長	学級経営として、それぞれの方式でどのような取組がされていたかということが考慮されていない。教科センター方式であっても、学級単位で行われる授業もあるはずだが、単に同じ集団でいる時間の長短だけで整理されているのではないか。
委員	学習指導要領にも学級経営が謳われていると思うが、国は教科センター方式での学校運営を前提とせずに「学級経営」という言葉を用いていると考えられる。「学級経営」という言葉があるから、学級固定方式に戻さなければいけないという考え方では議論がずれてしまう。学習指導要領における「学級経営」とは何が問われているのかと考えると、おそらく特別活動などの充実や、子どもの関係構築のことを「学級経営」と表現している。検討するのであれば、教科センター方式ではこれらの成立が不十分であるのかどうかという点を比較して整理すべきである。
委員長	毎時間生徒が移動することや欠席・不在の把握が困難という課題は、本当に教科センター方式だから生じている課題なのか。課題として認識していれば、それを解決すれば良いだけということにもなる。この資料は総合教育会議で出た意見の整理であるが、今後私たちが整理していく際には、どのような子どもを育成したいかというビジョンを共有し、そのための手段としてどのような運営をしていくかという検討が重要である。2つの運営方式の良し悪しという形式上の問題ではなく、目指す子どもの姿に対してどうであるかという視点で検討しなければいけないと考えるが、委員の皆さんはいかがか。
委員	行政の政策としては、教科センター方式で得られた成果を示す必要もあると考える。成

	果もあったが、コロナ禍などを経て、時代の変遷と共に求められることが変化し、過去の教科センター方式のやり方では難しいため、これまでの運営で得た知見を活かしながら、このように変えていく、という説明が必要ではないか。
委員長	教科センター方式と教室固定方式を同時に実施していたわけではないため、二つの運営方式を比較する手法で成果を示すことはできない。課題も同様である。この資料にある課題とは、比較によるものではなく実際の教員や運営上の課題と思われる。評価をすればしたら、これまでの町の子どもの育成における目標や方針に対し、教科センター方式での教育によりどれだけ近づいたかという評価はできると考える。目標に向かって着実に進んでいけば、十分成果があったと言えるのではないか。
委員	委員長の意見は1つの進め方としてあり得ると感じた。また、評価の仕方としては、施設の構造上実現可能となった取組も成果として示しても良いと考えた。例えば、通常の学校では難しいが、教材や机の配置などを教科ごとに適した状態に保ち、他の授業のために片付けなくて良いことや、掲示物を残しておくこと、異学年でもそれを見ることができるとことなど、教職員の意欲的な挑戦や工夫は一つの成果として見せられると感じた。
委員長	そういった取組はあったと思うが、いかがか。
委員	各教科のラウンジに行けばその教科に触れられるという環境づくりは十分できていた。英語は英語の掲示物、社会は年表、地図や新聞、国語は俳句、短歌など単元に関連する本を展示するなど各教科で教員が工夫していた。教科教務室だった頃は、教科部会や教材研究・授業の準備の話が常にでき、教室が近くすぐに行けるというメリットがあった。 一方、保護者からは、なぜ中学で大学のようなことをしなければいけないのかという厳しい意見もあった。その時に、「こういう子どもたちに育てたいからだ」という理念を共有できていなかったのではないかと思う。
委員	学校が荒れていて、教科センター方式を理想どおりに運営することが難しい状況だった時期もあったかもしれないが、今の聖籠中学校はそのような状況ではないという印象を持っている。今の教職員や生徒の実際の状況はいかがか。
委員	今は学年ごとの教務室になっているが、例えば3年生の教務室前では、英語のプリントを置いて、生徒が問題を解いたら丸付けするというような取組みや、アンモナイトを展示するなどの取組が行われていて、教科ごとのラウンジでなくても工夫できている。そのため教科ラウンジがあるからこそ可能となる取組はあまり思いつかない。 教科センター方式において、教室の移動があることで自主性が高まるという考え方については、聖籠中学校の教育目標にも「自立」を掲げているが、決められた教室に自分で行けたら自主性や自立かという、違うように思う。そのため教科センター方式が特に良い方式かという疑問があり、教職員の負担が増えるだけなのではないかと感じている。
委員	教科ごとの教務室については、授業の進め方など情報共有がすぐにできたことがメリットであったと感じている。ラウンジについては、今はタブレットや教室のテレビがあり、すぐに映し出すことができるため、掲示物の意味合いが薄れてきていると感じる。掲示物によって意図していなくても目に入るというメリットはあるかもしれないが、定期的に変えなければ意味がなく、時間と労力をかける必要がある。目立って荒れている生徒は少なく、一時に比べれば、その点の教員の負担は少なくなっているのではないか。教員のやり方次第で施設環境の強みを活かすことができるという印象を受けた。

委員	<p>労力を考慮しなければ、教科ごとに自由に掲示や準備ができるラウンジは教員にとって魅力的なものであると想像した。今の話を聞き、教科センター方式は可能性が非常にある方式だと思うが、労力や生徒の状況によっては、一長一短だと感じた。</p>
委員	<p>コロナ禍後、中学校では、校舎のメリットを活かすために教室を移動するシステムを再開しようと試みたが、教員からは、移動が多いと生徒が視界に収まりきらず不安だ、目の届かないホームベースで生徒が好ましくない行動をするなどのトラブルが生じるのではないか、など反対の意見が多く出ていた。</p>
委員長	<p>反対の意見は、生徒から出ていたのか、教員から出ていたのか。</p>
委員	<p>生徒からも、移動が面倒だという意見が多く出ていた。教員からの意見では、前述のほか、1人で行動することが苦手な生徒にとっては負担が大きく、教員として見ていて辛いという意見があった。</p>
委員長	<p>生徒にとっては、苦になっていなかったということは考えられないか。</p>
委員	<p>そのような生徒も中にはいたかもしれないが、生徒自身に聞いても答えられない生徒もいた。教科センター方式をやめて教室固定方式にした場合に、依然として成績が上がらず学校運営がうまくいかない状況になったら、それは教員の授業が悪いという評価になるということも議論しながら教員みんなで運営の仕方を考えていた。その頃は町予算の講師もいたため、少人数学習を行ったが、それにより教科センター方式のメリットを一部活かせると考えていた。ただ、学びにおいては授業の中身が根本である。どちらが教員にとって教えやすいか、生徒にとって学びやすいかという点が課題であったと考える。</p>
委員	<p>町や中学校のビジョン、学校の運営方式、授業の改善、人的資源の配置などの視点を一体に議論しなければならない。運営方式をどちらにするかという視点だけでは、いずれにせよ機能しないと考える。</p> <p>施設の活用について、広い校舎の光熱費や修繕費用などを考えると、有効活用しない状態では維持管理費が無駄になってしまう。校舎の活用法と学校運営のシステムをどう連動させていくかという議論も進めていくと良いと感じた。</p>
委員長	<p>どういう子どもを育てたいか、どういう中学校を目指すのかという基になる方針があって、今ある環境を活かしてその理想の教育をするためには、人員や備品など何が必要なのかということも含めて提言できればと考える。</p> <p>学校運営上の共通項目についての評価アンケートを委員は事前に回答しているが、形式だけで議論するのは危険だと感じている。協議後に再度アンケートを実施するということがあったが、実施するか。</p>
事務局	<p>この協議を経て、運営方式による形式的な再評価は行わないこととしたいが、いかがか。</p>
一同	<p>(異議なし)</p>
委員長	<p>運営方式という形式的な分け方での比較では結論は出ないということかと思う。それも踏まえ、次の議事の審議をお願いします。</p>

#### 議事（４）運営方式による効果と課題について

事務局	<p>(資料に沿って説明)</p>
委員長	<p>総合教育会議では、何らかのアンケートが必要ではないかと結論づいているということ</p>

	<p>である。アンケートを取るとしたら、中学校、小学校、保育園、幼稚園の保護者に、中学校卒業時点でどんな子どもになってほしいかということや、中学校でどんな力をつけてほしいかということ进行调查し、併せて、町教育委員会や中学校の教職員がどんな子どもに育てたいと考えているかということ进行调查するのはいかがか。中学校の教育目標や町のビジョンがあると思うが、それらとアンケート結果から見える聖籠が求めている子どもの姿に対して、必要なことを検討し、提言するというためのアンケートであれば、実施する意義があると思うが、いかがか。</p>
事務局	<p>補足であるが、この審議でアンケートは必要ないという結論となる場合は、その理由をまとめていただきたい。</p>
委員	<p>資料のアンケートを現段階で実施しない理由の中に、「回答者個人の当時の記憶に大きく依存する」と記載があるが、記憶に依存することが問題なのではない。前回のアンケート案では、回答が当時の学校に対する印象に依存してしまうため、教科センター方式か教室固定方式かという本来問いたいことに対する正確な回答とは結び付かない可能性が高いが、本来問いたいことを問いかけているような構造だけは筋が通っているように見えるため、そのまま調査してしまった場合、結果として正確さに欠けたままもっともらしく数値に表れてしまうことが問題ではないかと考えていたところである。</p> <p>委員長の提案については、一考の価値があると思う。一方で、総合教育会議では、政策の効果検証を目的としたアンケートを想定していたと理解している。委員長が提案するような内容のアンケートでは、調査しても効果を見ることはできない。</p>
委員長	<p>このような今後の子どもや中学校の在り方や希望を問う内容でアンケート調査をした場合、総合教育会議では納得いただけるのか。効果検証のためのアンケートでなければ納得いただけないのか。保護者には、二次元コードからウェブ回答してもらう方法で実施すれば費用をほとんどかけずに実施できると思われるが、いかがか。</p>
事務局	<p>総合教育会議では、どちらの学校運営方式が良いのか、総合教育会議のメンバーだけでは判断が難しいため、専門的な知見をお持ちの皆様からご意見を伺いたいという経緯があった。今審議いただいている内容のアンケートは、効果検証に向けた内容ではないが、どのような教育が必要であるかという町民の意向を確認するものという位置づけで調査し、その結果を基に、必要な教育の実現のためには今後どのような学校運営が望ましいかということを提言いただけるのであれば、納得すると思う。</p>
委員長	<p>大事なのはこれからの子どもたちをどう育てていくのかということである。過去にやってきた教育に戻ることや他校と同じ教育をすることが目的ではない。そのため、アンケートでは聖籠町の皆さんが願っていることや目指したいと思うことを明らかにし、現行の学習指導要領などで求められていることも踏まえながら、それらに向かうために聖籠中学校でどのような教育が必要かということ整理していく方向性で検討を進めるのが一番良いと思うがいかがか。</p>
委員	<p>委員長の提案に賛同する。前回のアンケート案では、アンケートが本当に民意を反映するのは疑問に思っていた。教科センター方式で運営していた中でも、生徒が教科の教室に行くワクワクして楽しかったという思い出があったり、教員が教科の教員同士で集まって取り組んだことが他校ではできなかった良い思い出になっていたりなど、良かった点があるはずである。このような事実が聞き取りできれば、教科センター方式における成果</p>

	<p>として十分に示せるため、教科センター方式が悪かったために見直すという結論に誘導するような質問をするのではなく、このような良かった点についての回答が得られるようなアンケートやヒアリングを実施していただきたい。これまでの良さも活かしながら必要なところを変えていくという組み立てが好ましいと考える。</p>
事務局	<p>総合教育会議では、この聖籠中学校運営方式検討委員会の委員には保護者などの一般町民が含まれていないため、一般町民の意見を取り入れる手段としてアンケート調査の実施を考えていた。アンケートに限らず、ヒアリングやインタビューなども含め、なんらかの方法により一般町民の意見も取り入れたいという思いが総合教育会議にはある。</p>
委員長	<p>良かったことのヒアリングも、今後を考える上で活かせる点として参考になる。それでは、アンケートでは聖籠町の皆さんが中学校に望んでいることや、どんな子どもになってほしいかということについて意見を聞き、併せて、当時教科センター方式を経験した教職員や卒業生に、教科センター方式で良かったことをヒアリングするという両面で進めたい。この他にも必要だと思うことがあればご意見いただきたいが、よろしいか。</p>
一同	<p>(異議なし)</p>
委員長	<p>今後の検討の参考に、聖籠中学校の教職員で、教科センター方式に戻したいという希望を持っている人はいるのか。</p>
委員	<p>いないのではないかと。どういう子どもを育てたいかということに合わせて学校運営を考えていくということは、教科センター方式と教室固定方式の2択ではなく、色々なことを選び取っていくということになると思うが、環境を整えないまま運営方法を変えてしまうと、教職員にとっては負担が大きく、反発が生まれると考える。現在、教務室は学年ごとに配置し、教員間の情報共有などは学年主任が中心となりある程度うまくいっている状況であるが、今後の検討の結果、例えば教科ごとの配置に変えることになったとしたら、相当に運用の仕方や人員、教務室の配置などをしっかり考えてからでなければ、学校で混乱が生じる恐れがある。人員を増やすとしても、講師が見つかりにくい状況である。若い教員ばかりになってしまっても、その育成が課題になる。理想だけでなく、実際の状況も考慮しながら検討を進めたい。</p>
委員長	<p>我々からは、求められている子どもの姿や教育を目指すために重視・配慮する必要があることについて提言することが可能なのであって、施設の使い方や運用面まですべてを決めつけることはできない。総合教育会議も同様である。我々からの提言を受け、最終的には、学校が実際の運用を考えたり、工夫したりする必要がある。実際の状況の中で実現可能な範囲については学校が判断できる裁量を持っていなければ成り立たなくなる。その点については、我々も気をつけながら検討を進めるべきである。</p> <p>学校には、提言を受けた後、教職員が目標を共有し、それに向かってどのようにしたいのか、単に大変だからやらないという検討ではなく、前向きにできることを検討いただきたい。また、総合教育会議は、どのような子どもを育てたいのかという内容を話し合う場でもあると考えている。それに向かって人員や予算など、学校にどのような支援をするかということも総合教育会議で検討していけるよう、その材料となるような提言にしていきたいと考える。</p> <p>以上で本日の議事を終了する。</p>

以上